

## 『二十四の瞳』の編集と出版

古木 茜

壺井栄（1899－1967）は、香川県小豆島出身の小説家・童話作家である。『二十四の瞳』は壺井栄の代表的な小説のひとつであり、1952（昭和 27）年に、キリスト教系の家庭雑誌「ニューエイジ」に連載された。この小説は、第二次世界大戦前後の社会を背景として、瀬戸内海の小豆島の岬の分教場に赴任してきた若い女性教師と 12 人の教え子との交流を描いている。1952（昭和 27）年 12 月に光文社から単行本が刊行され、1954（昭和 29）年に木下恵介監督・高峰秀子主演で映画化されると人気を博し、原作の『二十四の瞳』も多くの読者を獲得した。

『二十四の瞳』は、1952（昭和 27）年から現在に至るまで、多くの出版社から単行本、全集の一部、児童書、文庫本などの形態で、94 点出版されている。これらの出版物では、たとえ本文が同じであっても、版型、ポイント、挿絵、注などが、図書によって異なっている。従来、『二十四の瞳』の作品解説や論考は若干発表されているが、『二十四の瞳』の全刊行物を対象とした編集・出版に関する分析・考察は、十分には行われていない。

そこで、本研究では、『二十四の瞳』の図書 94 点中で現物確認できた 78 点を対象として、編集・出版の状況を分析・考察した。その際、印刷・出版技術の動向、本文の異同に注目しながら分析した。研究方法としては、文献調査と内容調査を用いた。

研究の結果、以下の事柄が明らかになった。

- ・『二十四の瞳』の出版点数は、1950 年代 9 点（9.6%）、1960 年代 28 点（29.8%）、1970 年代 33 点（35.1%）、1980 年代 12 点（12.8%）、1990 年代 6 点（6.4%）、2000 年代 6 点（6.4%）、2010 年代 0 点（0.0%）であった。出版形態は、「壺井栄の著書」36 点（38.3%）、「共著・文学全集など」51 点（54.3%）、「壺井栄の全集」7 点（7.4%）であった。
- ・子ども向けの図書は 45 点（57.7%）、大人向けの図書は 33 点（42.3%）であった。1950 年代、1960 年代は大人向けの出版点数のほうが多い。しかし、1970 年代以降は子ども向けの出版点数のほうが多い。
- ・使用されたポイントの大きさは、9 ポイントの 31 点（39.2%）が最も多く、ついで 8 ポイントの 15 点（19.2%）であった。読者対象別では、10 ポイント以上の図書は全て子ども向けである。一方、7.5 ポイントや 8.5 ポイントの小さいポイントで出版されている子ども向けの図書も多い。大人向けの図書は全て 7.5～9 ポイントであった。
- ・注のついた図書は 53 点（67.9%）であった。1960 年代以降は注がない図書より注がある図書の出版点数の方が多い。読者対象別にみると、子ども向けで注がある図書は 45 点中 41 点、大人向けで注がある図書は 33 点中 12 点であった。図書 1 点あたりの注の平均個数は、「子ども向け」132.0 個、「大人向け」29.6 個であった。
- ・ルビがつけられている語句、段落構成、ひらがなで表記される語句、漢字で表記された語句、等、初版とまったく同じ本文であったのは、光文社が 2005 年 12 月 10 日に刊行した復刻版『二十四の瞳』のみであった。復刻版以外の 76 点は、本文に関して異なる点が存在した。子ども向けの図書のほうが、本文が変化している図書が多い。
- ・現在は、紙媒体の図書に代わって、電子書籍が台頭し始めている。電子書籍には、紙媒体の図書のように紙面の制約は存在しない。しかし、出版社が今までに蓄積してきた紙媒体の図書を編集・出版する際の工夫は、原典とする図書、版面の構成、表紙絵や挿絵の有無、注を付ける単語の選定や注の種類、等、電子書籍であっても参考にできる点がある。

（指導教員 大庭 一郎）